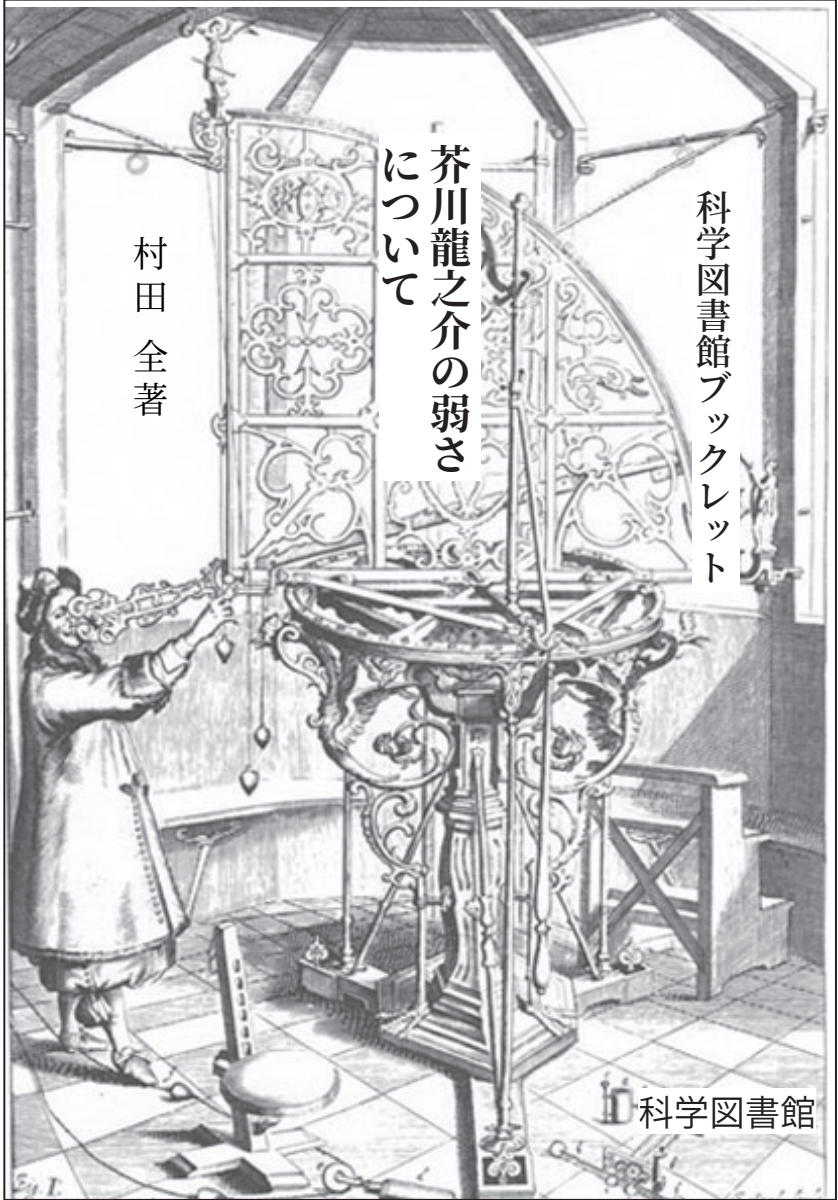


科学図書館ブックレット

芥川龍之介の弱さ
について

村田 全著



科学図書館

芥川龍之介の弱さについて

五ノ二

村田

全

何も云ふことをもたない内から

喋舌らうとしてあせるものは、

何事も云はないで了ふといふ

危険が大である。

——ロマン・ローラン——

世の中には、弱い不幸な人間がある。しかし人は本當の彼をしらない。彼は益々孤独になる。そして益々弱く且つ不幸になつてゆく。芥川も亦その一人であつた。

才子、文人、新技巧派……彼をみる人の眼鏡はかゝる偏つた色に曇つてゐた。少くとも本當に死を實行した「彼」があらはれる迄は、彼は常に新技巧派の巨匠であり、その作品は理智的な、謂はゞ人生の傍觀者の作品とも云ふべきものであつた。彼が眞面目な人生の追求者であり彼の文學がその血を以て描かれたものだつたといふ事が（たとひ一部の人達の中にでも）知られたのは、終に彼の死後であつた様である。言ひ換へれば彼は自らの死を以て始めて自己の眞面目を買ひもどした作家であつた。

無論人は誰でも自分を理解さるゝ事なく終るものではあらうが、何故彼はかく迄自己を知つてもらへなかつたか。いくつかの理由があらうと思ふ。然し今此處で私の云はんとする所は彼が此れ迄

の日本の知らなかつた複雑な都会人作家としてあらはれた事である。複雑とは何を意味するか私はそれを次に述べる。

「芥川は都會人だ都會人だと思つてゐたが結局僕と同じ様な孤獨な人だつた。」といふやうな事を云つたのは確か佐藤春夫であつたと思ふ。芥川はかくの如く孤獨をあく迄孤獨に守つた人であつた。尤も初期から晩年にかけて彼は何度も訴へてゐる。しかし氣が弱かつたせいかも知れない、その訴へは確かにか細そかつた。羅生門にかゝげられた「君看雙眼色。不語似無憂。」といふ巻詩。更に進展する「わたしは不幸にも知つてゐる。時には嘘に依る外は語られぬ眞實もあることを。」然しせいぜい大正五年頃の初期の作品「孤獨地獄」の中に「或る意味で自分も亦孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。」とかいた彼を出なかつた。しかもそれ位の告白ですら、年と共に次第に二重、三重の反轉の彼方へと追ひやられて行つたやうに思はれる。そして時には又負惜みの様な言葉をそれとなく腕曲にもらしてみるのである。曰くストリントベリも金さへあれば「痴人の告白」は出さなかつたのである。

芥川の中には勿論單純な都會人芥川があつた。然しそれと同等或はそれ以上に強い野蠻人芥川も亦彼の中に住んでゐたのである。その二人を住まはせた「彼」は複雑である。しかも尚悪い事には彼はその相反するどちらにも徹したがつてゐた。自由意思と宿命、神と惡魔、美と醜、勇敢と怯懦と、理性と信仰——その他あらゆる天秤の两端には、good senseをもつべきであるといつた芥

川ではあつたが彼は遂にその道を辿れなかつた。力は常に否定的な方向にはたらいてゐた。彼の中の野蠻人は眞面目になつて人生に訴へんとした事であつたらう。然しその邪魔をしたのは常に都會人芥川であつた。かといつて都會人芥川も亦徹底的に野蠻人を組みしく事をなしえなかつた。その結果があつた、後で思へば、とうなづかせる様な裏をもつた作品となつたのだと思はれる。人間芥川——野蠻人芥川はその裏に如實に現はれた事であらう。然し生きてゐた當時の都會人芥川を見た人達が、どこにそこ迄氣をまはす手懸りをみただらう。人々の芥川を知りえなかつたのも無理からぬことであつたかも知れない。

尤も此の「二人」の存在は、彼の作品を前時代のそれと切りはなしたその複雑性といふ點に於て、それに好結果をもたらさずにはおかなかつた。即ち一つの物を「二人の眼」で見る事が出来るといふ點である。異つた二つの觀點から芥川は常に解剖をほし、にする事が出来た。その心理描寫や藝術作品の描寫等にもあらはれた妥協を許さぬやうな科學的觀察眼はこゝに宿命的な、その端を發つしてゐると思ふのである。此の二人が後天的に芥川に具つたとは私には考へられない。芭蕉とその弟子、馬琴、袈裟、良雄、更に下つては將軍N等々——巷間の英雄は彼の嘲笑と諷刺との前に於て、遂に一匹の人間にすぎなかつた。歴史小説はかくして最も明白に彼の眼をあらはしてゐる。従つて又彼の個性の最もよく現はれたのも（特に前期の作品では）これらの歴史小説だつたであらう。而も芥川は此の二つの眼を歴史小説にのみならず、大なり小なりあらゆる方面に使つてゐた。そのも

つともよくあらはれたものは彼の中期を代表すべき「藪の中」や「報恩記」の見方であらう。私はその中に彼芥川の透徹した眼の色をみて慄然とした事を覚えてゐる。かくして彼は「つぎはぎだらけのカンバスばかり」はつてある人生の舞臺の裏側を——みてはならない人間の誠を——常に見且前期の彼の如き逆に之を誇らんばかりであつた。しかし彼の本當の氣持はその誠の中に、人生に對する幻滅を深めて行つたやうである。人生は掘りさげてもく誠にみちてゐる。それを越えれば純粹な美しい人生があるやうに思ふのは文學青年的な自己欺瞞にすぎない。しかも芥川の眞意は單純にも之を求める所にあつたのかもしれない。ただその單純さを掩つた彼の鍍金は常に複雑以上の複雑さをもつてゐる。しかし兎に角その單純な氣持は時にあらはれる温い抒情味となつて東洋的なゆたかさをその作品に加へてゐた。自分の懷疑主義を淋しくながめてゐる様な感じのする事もあつた。此處にも私は又二人の芥川を見る。温い文人芥川と冷徹な科學者芥川とを。彼は實にあらゆる方面に於て二つの眼を働らかせながら更にその上に今二つの眼を加へて行つた。複雑な——少くとも複雑な道程をもつた——心の持主であつた。二つの眼が健全に他を嘲けつてゐる間はいい。一度その眼が互にむき合はされた時はどうであらうか。鏡をじつとみつめる時のあのせつない苦しき、それの二乗された様な苦しみが彼を襲つたに違ひないのである。自分自身の偽りをお互の芥川龍之介が睨み合ひ、暴き合ひ傷け合ひ、その結果が猛烈な自己嫌惡となる。それから先は私等の淺薄な頭には解る筈がない。云はば辯証法に敗北する、といふやうな反轉をくりかへして敗北の極北に達した

といふ感じがする。彼の目はいろんな事を知りすぎる位知つてゐた。人間が人間獣にすぎない事も。しかしそれは人間が又神である事を——獣は神の別名である事を——見ようとしなかつたやうである。少し長いけれど、此の時の自分の姿を彼は次の如くのべてゐる。

「彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲學者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面——情熱に驅られやすい一面のルツソオに近い爲かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面——冷かな理智に富んだ一面に近い「カンデイイド」の哲學者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はその人工の翼をひろげ、やすやすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歎びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら遮るものゝない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かういふ人工の翼を太陽の光に焼かれた爲にとり／＼海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

之は彼の遺稿の一節であつた。

然しその時の彼芥川白身の歴史は、歴史小説以上の明白な浮彫として彼自らの手で創作された。「藪の中」や「報恩記」のやうなものは今ではもうかきたくないのだ——彼は一轉した。「玄鶴山房」

「蟹氣樓」何かしらストリントベリの暗さを思ひ起させる様な作品がつゞく。それは「河童」のやうな諷刺にとんだ作品に迄もくらゐ光を投げかけてゐる。——更に一轉する。「闇中間答」「齒車」「或阿呆の一生」「或舊友に送る手記」——私は之を未發表のまゝ終つた小説だと思つてゐる。——「西方の人」……そこには健全な力はないかも知れない。然したとひ日光はなくとも、冴えきつた利鎌の様な三日月の淡い美しさはある。目を掩はせる様なそれらの一葉の作品の中には、これでもか／＼と絶叫しつゝふるはれた弱いしかし鋭い剃刀の刃が我々の心に悲しい傷痕をのこしてゆく。それは近代日本の生んだ聖書であつたと同時に〔註〕「西方の人」の中のクリストは龍之介とおきかえる事が出来るのである。〕又悲しい「此の人を見よ」であつた。が、此處に於ても我々の注意すべき大切な事は、芥川を見直さすべき之等の作品が發表された時には、既に芥川が死んでゐた事である。

彼は遂に假面の下に倒れてしまつた。最も初期に屬する「ひよつとこ」の中に彼の描いた山村平吉の中には晩年の芥川がそのまゝ現はれてゐる。私は彼が大正四年といふやうな若い時代にかゝる作品をのこした意味がわからない。才氣喚發といつた時代の彼が自畫像として平吉のやうな人間をこしらへる筈はなかつた。現に彼が「理性のわたしは教へたものは畢竟理性の無力だつた」と云ひ又「彼は惡黨になる事は出来ても、阿呆になる事は出来ないと信じてゐた。が何年か立つてみると少しも惡黨になれなかつたばかりか、いつも唯阿呆に終始してゐた。」と云ひはじめたのはやつとその死の二年前位からであつた。それは兎に角平吉の姿そのまゝになつて行つた晩年の彼は恐らく

その作品をつくらしめた何物かに對して何とも云へない恐怖を感じた事であつたらう。芥川は「齒車」の「夜」の中に、ナポレオンはセントヘレナに流された後に昔自分のノートのほしにかいた「セントヘレナ、小さな島」といふ一語を思ひおこして慄然たる恐怖を経験したといふやうな事をかいてゐたが、私は之も亦自分の恐怖をそれとなく云ひあらはした彼の小説ではなかつたかと考へてゐる。そんな事はさておいて、彼山村平吉は嘘つきである。酔ふた時に、自分のやつた事等皆はつきりとおぼえてゐる。しかし人に會ふと「酔ふと何もわかりませんもので。」等といつて誤魔かしてゐる。そして酔つた時の平吉としらふである平吉は同じ人間とも思へない位違つてゐる。どちらが本當の平吉か自分ながらわからないといふ様な人間である。「Janus」と云ふ神様には首が二つある。どつちがほんとうの首だか知つてゐるものは誰もゐない。平吉もその通りである。「平吉はその後お花見の舟の中で馬鹿踊りの最中に頓死するのである。彼の最後はかうである。

「すると其時、呼吸とも聲ともわからない程、かすかな聲が、面の下から親方の耳へ傳つて來た。「面を……………面をとつてくれ……………面を。」頭と親方とはふるふる手で手拭と面を外した。

しかし面の下にあつた平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなつてゐた。……………たゞ變らないのは、つんと口をとがらしながらとぼけた顔を胸の間の赤毛布ゲットの上に仰向けて、靜かに平吉の顔を見上げてゐる。さつきのひよつとこの面ばかりである。」

彼の處女作には遂にすべてがあつたのである。

以上のように芥川は結局生前に於て理解されうる作家ではなかつた。(自殺の出来たのは考へ方によれば寧ろ彼にとつて幸福だつたやうである。)では彼はその無理解に對してどうしたか。彼は幾度か、諦めた様な意味の言葉を吐いてゐる。そして平凡に生きたがつたふりをしてゐる。「侏儒の祈り」——どうか英雄にして下さいますなといつて祈る侏儒——。「人間らしさ」——發狂したスウィフト程頭がよくない自分を喜んでゐる芥川——。かういつたものに皆この氣持を描いたアフォリズムであるが、それは結局に於ける彼の眞情ではなかつた。それは時に頭の中で考へて得た云はゞ眞情をはなれた虚偽の願ひであつた。屢々云つてゐた様に彼は將來に自分の讀者を求めてゐた。「闇中間答」の如き、彼は二度も「僕は將來に讀者をもつてゐる」を繰り返してゐる。彼は弱いくせに——そして弱いものは常であるのかも知れないが——亦恐しい野心家であつた。彼の本當の心の中は屹度「俺でも」といつた氣持、古今の天才の間に自己を並べたい氣持があふれてゐた事であらう。流石に彼ははつきりとは云はなかつた——彼は勿論レフアインされた都會人だつたのだから。しかし清水は蓋をしても常にどこかへは流れ出してくる。僕は絶望してゐるといふ事は望みにもえ上つてゐるといふ事の別名なのである。望みのないものは絶望等知つてはゐないのである。「或阿呆の一生」の一節「制製の白鳥」の中等にも彼はこんな言葉をのこしてゐる。

「文藝上の作品に必ずしも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。——かう云ふ氣も彼には働い

てゐた。彼はその爲に手短かに彼の「詩と眞實と」を書いてみることにした。

或時はずとはつきりと云つてゐる。初めの方の一節「火花」を見よう。

「架空線は不相變鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。

が、この紫色の火花だけは——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。」彼はこんなつぶやきをもらしながら、不可能を可能にせんとするその試みをくりかへしてゐた。創作は「三分ノ人事、七分ノ天」である。その言葉を引用した事のある彼であつたが、彼は己れを知らぬもの以上にその言葉をしらなかつた。そして最後にトライにトライを重ねた後、遂に自分も亦笑ふべき遼東の豕だつたとわかつた時に——彼が必ずしもそれであつたか否か、それは私には何とも云へない。只彼のその時の狂ほしいばかりの精神状態が時として彼自身をかく絶望させたのであらう事は想像される。——兎に角その時に彼は理性の無力を見、自らの中に或る阿呆の悲喜劇を見、遂にその一生を無意味と迄も考へた事であらう。これも亦彼の死の一因のやうに考へられる。只それが果して死の外には解決の見出しえないものであつたかどうか、それは彼の外には——少くとも彼の様な弱さをもつた人間以外には——解る筈はない事であらう。科學はかういふ人間の主観に對して遂に一厘の力ももつてゐないんだから。彼は結局東洋的な「あきらめ」に任しえなかつた。そして自らの自負心と、自らの自己懐似の鬭争の前に倒れた。——之が讀者の無理解に對した彼の態度の結末だつたやうに思はれる。

尤も、彼がもつと強い人間であつたならば、勿論自殺等といふ事もしなかつただらうし、又その野心にしても絶望を忘れて貫き徹された事と思ふ。事實あの「齒車」や「阿呆の一生」等を一步放れて一個の小説として再現する事が出来たならば、芥川が讀んで泣いたといふ志質直哉の「暗夜行路」なんかを遙かに越えた輝かしい金字塔ピラミッドが完成されてゐた事であつたらう。芥川の歩んだのは九十九里の里程であつた。一里——天才を我々から切りはなすべきこの最後の且最大の難關たるこの一步——彼は之を此の上なく願つたに拘らず輝かしいこの一步を印しないでその行路は終に百里に達しなかつた。凡人のゆきうる最大級の距離を歩んだ彼ではあつたが。この邊はたしかに彼の非力であつて、致し方のないものだつたらうが私は、或は日本のもつた天才の一人に加へられてゐたかもしれない「超人芥川」を夢みて、その非力の原因の一だつた性格的な弱さをそこが人間の宿命なのだとは考へてゐながらも惜しまずに居られないのである。尤も弱さといつても彼の弱さは單純なそれではない、即ち天性の弱さに拍車をかけた複雑な二つの自己の鬭争もそれであるし又逆に彼がその分裂した自己を統べえなかつた點も亦たしかに宿命的な彼の弱さであつた。此の二つはどうどうめぐりをやりながら全體の芥川龍之介を限りない疲勞困憊の中に逐ひやつて行つた事であらう。勿論個人的な幾多の理由或は時代の流れと喰ひ違つた彼の信條、それらも皆その破滅の立派な原因であつたらうが。かういふ所をみると結局我々は誰も宿命論の中に逃れてゆかなければならない様な感じもする。一は遂に一に終らねばならなかつた。そして終つたんだといつた風な感じがする。然

しそれは私又の考へかも知れない。」

彼の弱さ——それは、終生かはらずに彼の心の或はその作品の底を流れた温さとなり、進んではすみきつた俳の世界ともなつてあらはれたであらうし、(芥川のもつた抒情味といふもの、出發點を私はこゝに求めるのであるが)時には彼の絶望となり、懷疑となり、自己嫌惡となつてあらはれた事であつたらう。然し私は又その弱さと丁度反對にみえる彼の諷刺、嘲笑、更に進んでは反逆的な、遇像破壊的なそのポーズそれらも終に弱さに生れた彼の強さの中に崩え出たものであつたと考へたいのである。最後に芥川の文學全部。それは彼の非力の故に——弱さに終始せざるをえなかつた、其の非力の故に——遂に古今の天才に伍する事は不可能であつたが、敗北の極地に至つた人間の絶叫は、今尚冷たく然し又熱烈に、我々によびかける何物かを持つてゐる。之丈が死を以て初めて贏ち得られた輝かしい弱さの勝利、云はゞ敗北の勝利であつたらう。

(出典不詳)

- 出典不詳。村田全先生が立教大学を退職されるにあたり、退職を記念する会合で配られた村田先生を記念する小冊子の中には収められなかった小文。文頭に五の二 村田全とあることから、旧制中学校五年生の時に書かれたものか。
- 先生の遺志を尊重して、原則として旧漢字、旧かな遣いとした。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>